様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ９ 月 ２６ 日現在

機関番号：８４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１３５８

研究課題名（和文）埴輪生産組織の構造分析と古代手工業論による古墳時代日韓交渉史再構築の基礎的研究

研究課題名（英文）The basic research on history reorganization of negotiations of Japan and Korea in the tumulus period, using structural analysis of the Haniwa industry and ancient handicraft industry theory.

研究代表者
古谷　毅（*FURUYA, *TAKESHI）

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部・研究員

研究者番号：４０２３８６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,800,000円

研究成果の概要（和文）：　埴輪は古墳で執行された葬送儀礼を立体的に反映した重要資料で、その分布拡大には埴輪製作工人の移動と首長間の政治的交渉が想定される。このような背景をもつ韓国出土埴輪の生産構造の解明は古代日韓交渉史の実像解明に不可欠な課題である。
　本研究においては韓国の埴輪生産組織の構造分析を行うことで、埴輪製作技術の伝播とその背景にある文化的・政治的関係を解明する基礎的データを得ることができた。さらに、日本古代史の先行研究を検討し、その成果に位置づけながら古墳時代日韓交渉史を再構築するための基礎的分析を行うと共に、このような新たな歴史像の再構築を図る研究方法を確立する基盤を形成して研究成果の公開・発信を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的成果は、研究期間中のコロナ禍の影響による予算削減と期間縮減のため一部は限定的であるが、主に次のような点が挙げられる。まず、現地(韓国)で編成された埴輪生産組織(構造)を復原する基礎的な分析結果が得られた。一つは全羅南道・咸平郡金山里古墳出土例の日本列島(倭人)が関与したと想定される事例で、今一つは同・潭陽郡内洞里双墳出土例の在地工人のみで製作が行われたと想定される事例で複雑な生産の実態を考古学的に明らかにした。
　社会的意義は、韓国内における複数の公開研究会でこのような研究成果を踏まえた考古学的な共通認識をもつことができ、新たな古代日韓交渉史像を再構築する足掛かりが得られた。

研究成果の概要（英文）：The haniwa is the important archaeological materials, which molded funeral rituals carried out at an old burial mound three-dimensionally, and the movement of the haniwa production artisan and the political negotiations between chiefs are assumed for distribution expansion. An elucidation of the production structure of the Korean haniwa having such a scenery is essential for the elucidation of the haniwa of the history of ancient Japan-Korea negotiations. We got the basic data which elucidated the spread of the haniwa production technology and the cultural political relations in the background by analyzing the structure of the haniwa production organization in Korea. In addition, I performed basic analysis of the history of Japan-Korea negotiations rebuilding in Kofun period while placing it as results of research of the Japanese ancient history. We established a study method to plan the rebuilding of the haniwa of such new history and disseminated of results of research.

研究分野：日本考古学

キーワード：古墳時代　埴輪生産　前方後円墳　古代手工業論　古代日韓交渉史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１.研究開始当初の背景

日本考古学では、古墳時代は日本列島(以下､列島)における古代国家形成期とされ、前方後円墳で執行された葬送儀礼(イデオロギー)は古墳時代社会の安定と成長を促し、その共有と拡大は政治的・文化的に列島の地域統合と古代国家形成において重要な役割を果たしたと考えられている。

円筒埴輪・壺形埴輪・朝顔形埴輪(以下､土器系埴輪)と器財・人物・動物形などのいわゆる形象埴輪で構成される埴輪は、前方後円墳の出現・終焉と軌を一にして消長することから、前方後円墳の歴史的性格と密接な関係にあると想定され、古墳で執行された葬送儀礼を立体的に反映した重要な考古資料である。近畿地方で成立した多様な構成をもつ埴輪は、古墳時代前半期(3世紀後半～5 世紀)に岩手県から鹿児島県の各地方に拡大し、前方後円墳の分布とほぼ一致することも歴史的重要性を物語る。

なかでも、複雑な構造をもつ形象埴輪は高い技術的専門性を要するため、分布拡大の背景には埴輪製作工人(以下､埴輪工人)の移動と列島内首長間の政治的交渉が想定される。このような埴輪群構成の形成過程と分布拡大の実態把握は、日本古代国家形成期(古墳時代)研究の重要課題である。

一方、韓国考古学では、５世紀後半から６世紀前半に朝鮮半島(以下､半島)西南部地方(全羅南道南部)に分布する前方後円墳と埴輪の調査・研究が進展し、2010 年代に入り墳丘を廻る円筒・壺形土器(以下､円筒形土器)の集成的研究も進展している。さらに近年では、動物・人物形の形象埴輪(全羅南道咸平郡金山里方台形古墳：方墳・形象埴輪)が公開・報告された。このうち、円筒形土器は従来の研究で在地工人の製作であることが明らかであるが、複雑な形象埴輪の一部は列島の埴輪工人との間に技術系譜が想定され、両地域間で技術交流の具体的な分析が可能と考えられた。

また、半島西南部では、５世紀中頃から後半のいわゆる倭系遺物出土古墳の調査・研究が進展している。なかでも、このような事例の代表として、雁洞古墳(全羅南道高興郡浦頭面吉頭里：円墳・帯金式甲冑・百済式冠他)はＡ)倭系帯金式甲冑やＢ)金銅製冠帽・飾履、Ｃ)サルポ(鐘)の出土が注目され、Ａは倭王権、Ｂは百済王権から入手した器物とみられる。Ｃは灌漑導水儀礼用の農具形鉄製品で首長権を象徴する儀器と想定され、被葬者の百済・倭王権への両属性を強く示唆する。

これらの資料は５世紀の日韓交渉と、韓国における円筒形土器・形象埴輪出現の背景を物語る資料であり、日韓古代史における対外交渉史に位置づけた上で、検討・分析を進める必要がある。このように、埴輪は考古学・古代史の両分野において、日韓双方で型式学的な分析を踏まえた総合的な分析・検証作業が不可欠であり、また研究の進展および資料の整備状況において、調査・研究の実施が可能な段階を迎えている。

２．研究の目的

埴輪は、基本的に現地で編成した生産組織で製作・配置・配列され、完成された古墳墳丘に樹立される「墳丘表飾」という性格から、同一古墳から出土する埴輪群は、ほぼ同時に生産されたという共時的な関係を想定することができる。また、墳丘に配置・配列される出土状態から、墳丘の築造と一体となった計画性の下に一括で生産および使用されるという、きわめて限定的な特性をもつ。また、可塑性の高い粘土製品で、製作者の技術および志向性を直截に反映する遺物であり、製品に遺存する技術的痕跡の系譜を追究することで、埴輪製作に関わる技術者(「製作工人」)の移動を具体的に分析することが可能な考古資料(遺物)であることから、考古学的に生産組織や工人移動に関する具体的検証が可能な資料的特性をもつ。一方、土器系埴輪は在地土器との技術的関係性が認められる例が多く、各埴輪生産は地域社会における社会的分業の一部として成立したと想定される。さらに、埴輪群の組合せ(組成)は古墳毎に著しく相違し、埴輪生産組織の成立には個別地域的な政治・文化的背景が存在していた可能性が高い。

本研究は、このような特性をもつ日韓出土埴輪を分析対象にして、生産組織論と古代手工業論の研究視角から比較・検討し、両地域における埴輪の製作技術・系譜および製作の契機と、その歴史的背景を明らかにする。また、日韓考古学と日本古代史学の総合化により、古墳時代の日韓技術交流史および政治・文化交渉史として再検討し、新たな歴史像の再構築を図る研究方法を確立する基盤を形成することを目的とすると共に、その成果・研究法と蓄積データの公開・発信を図ることも目的とする。

３.研究の方法

「研究方法」は、分析対象資料の特性と研究状況の背景から、本研究では次のような方法と計画を策定して実施した。なお、研究期間中のコロナ禍の影響と一部繰越・再繰越の承認可否による予算削減と期間縮減のため、予算・期間の猶予範囲内で適宜、実施可能な計画・方法への変更を行った。

１）分析方法
　第一に、埴輪調査に関する分析方法は次のとおりである。
　埴輪の製作技術を具体的に比較・検討するためは、実地調査を行うことが不可欠であるが、所蔵先等での調査は時間的制約もあり、作業効率化を図るためにも、①調査方法・②記録方法および③作業手順を以下のように計画した。
①調査方法：　まず、資料の肉眼観察を検討の中心におき、器種分類に基づいた出土埴輪群の群構成を把握することに務めた。大型で重量が大きい粘土製品である埴輪は、製作時において重量および乾燥・焼成に関して一般の土器などの製作とは大きく異なる困難な状況が想定される。したがって、胎土すなわち素材の粘土および混和材の選定と焼成方法も埴輪製作技術の重要な一部分と考えられることから、胎土・焼成状態の観察も重視した。このような理由から、分類に採り上げた基本的な属性は、形態(器種分類)・形状(型式分類)と構造(製作技法)および胎土(粘土・混和剤)・焼成技術である。また、出土埴輪群の構成(組成)において、背景にある工人編制を分析するために、埴輪製作時の使用工具（ハケメ工具）の痕跡であるいわゆるハケメ調整痕跡の調査・分析も実施した。
②記録方法：　次に、調査で得たデータは、実施した分類基準(属性)を項目別に調書にまとめるとともに、主に写真撮影による資料化を行った。また、研究組織(同 代表者・分担者)所属機関の所蔵品などで、時間・作業場所および作業従事者(研究支援者)が確保可能な場合は、製作技術と使用工具の比較検討のために、実測図などの作成も実施した。
③作業手順：　具体的には、次のように計画した。まず、出土埴輪の器種分類を行った上で、製作技法に基づいて細分した。このとき出土した資料については可能な限り、細片に至るまで全点について点検を実施することとした。大型の土製品である埴輪は風雨に曝されて永い年月で風化・崩壊が進行したと考えられることから、墳丘上には破片として残されている可能性が高いためである。また、前述のように埴輪の製作においては、粘土や混和剤の選定も重要な製作技術の要素と考えられることから、器種分類できた破片については、併せて胎土など・焼成の検討が可能であるためである。また、前期・中期古墳に樹立された埴輪の場合、円筒・壺系埴輪には薄い造りをもつ個体が多い。とくに、器財埴輪などはいわゆる粘土板造り技法を多用するために容易に分解している個体も多く、原形を保つものが極めて少ないことから、出土した埴輪は細片であっても、本来の埴輪群の樹立状況および構成の一部を反映し、その特徴を捉えることが可能であると考えられるためである。
　第二に、生産組織論と古代手工業論の研究に関する分析方法は、次のように計画した。
　それぞれの分野に関する研究状況を把握するため、①調査方法・②記録方法および③作業手順として、毎年刊行されている学会動向(日本歴史学界の「回顧と展望」など)から当該分野の論文を点検して、そのリスト化を図る。また、主要論文においては、複写するなどして蒐集・分析し、基本文献の収集と主要な論点を分析・整理する。
２）調査・分析計画(スケジュール)
　本研究は、Ⅰ打合研究会・Ⅱ資料調査と、Ⅲ国内成果検討研究会を踏まえたⅣ国外(韓国)公開研究会・Ⅴ国内公開研究会と、段階的に構成して計画した。
　まず、Ⅰ打合研究会およびⅡ資料調査は、上記１）分析方法の準備・実施を遂行するために、分析対象資料の所蔵先において、各機関担当者との分析資料および分析作業場所等々の実施にあたって必要な条件などを協議し、協力を依頼した上で計画・実施する。
　また、調査したデータは研究組織(同 代表者・分担者)で分析の上で、研究協力者を含めたⅢ国内成果検討研究会を実施して、研究成果の基礎的な集約を図る。次いで、これらの成果を公開で行うⅣ国外(韓国)公開研究会およびⅤ国内公開研究会を段階的に設定して実施し、広く意見交換等を通じて、分析精度の確保と研究成果の公開・普及を図る計画を立てた。
　ただし、令和２～３年度および令和４年度上半期は、当初から新型コロナウイルス等感染症まん延防止措置による２度の緊急事態宣言発令で、外務省出入国条件等により著しく国内外の研究活動が制限されたため、各時期に、次のような遂行可能な研究方法を選択した。このため、当初の研究計画を大幅に変更せざるを得ず、実際の研究成果は大別してＡ（コロナ禍）期とＢ（コロナ禍後）期に分かれる。
　Ａ期は、まず研究成果の公開として、令和２年度にオンラインでシンポジウムと、その分析研究成果の報告・出版を計画した。また、令和２年度予算が繰越・再繰越となった令和３・４年度からは代替の研究推進措置として、二つの研究方法を計画した。
　第一には、このような環境下で確実に推進可能な研究支援者を雇用した研究代表者所属機関の所蔵資料調査である。第二は、研究分担者所属機関で研究支援者を雇用して文献資料調査を進めると共に、既存調査資料の整備・保存を実施した。前者（A-①）は、令和２～４年度に研究代表者の所属する京都国立博物館所蔵の兵庫県西宮山古墳出土埴輪の調査で、上記の方針に則り、検討と分析結果の記録(調書・実測図作成・撮影)を進めた。また、令和３年度に、これらの研究成果の公開を図るために、京都国立博物館において展示と講座(１月)の開催・実施を計画した。後者（A-②）は、令和３～５年度に研究分担者が所属する日本大学・大阪大谷大学図書館を利用した関係文献の調査および蒐集を行い、本研究の主要テーマである古代手工業生産論と日韓交渉史に関する研究資料の収集と集成を進め、また既存調査画像等の整理と保存を進めた。
　Ｂ期は、令和４年度下半期以降の日韓両国渡航緩和の方向性を承けて、夏期以降に調査・研究計画を具体化させ、国内外の調査打合を進めて準備した調査・研究である。秋期以降の日韓両国

の渡航緩和措置後に具体化して、直ちに韓国側研究協力者との連絡・調整の上、研究協力者と韓国内の調査・研究会を計画した。国内調査は、令和４年度９月(京都)・１１月(千葉)・２月(福岡)と令和５年度９月(兵庫)・２月(大分)・３月(岩手)で実施し、国外調査は令和４年度 11 月(羅州)・令和５年度７月(全羅南道)・３月(全羅南道) を計画した。国内研究会は、研究協力者を含めた「Ⅲ国内成果検討研究会」を計画し、令和４年度９月(京都)・２月(福岡)・令和５年度９月(兵庫)・２月(大分)・３月(岩手)で実施した。

ただし、国外調査については分析対象資料が韓国国立博物館(国立羅州博物館)による展示・公開および前後期間の整理・輸送等によって資料所蔵機関の調査不能期間が発生しており、令和４年度の現地調査は博物館における展示品の観察などによる基礎的な調査・分析に留まった。また、令和３年度予算再繰越の不承認を承け、予算削減による研究期間短縮に対応し、遂行可能な調査成果と既存研究成果の分析と公開を図るために、「Ⅳ国外(韓国)公開研究会」を強化し、既存の研究成果を含めた本研究の研究成果および課題の分析・討論を行う研究会を複数追加して実施する計画に変更した。

４．研究成果

１）A（コロナ禍）期の研究成果は、次のとおりである。

まず、Ⅱ-1 資料調査（国内）における研究成果（3.A-①）の公開としては、令和２年度に福岡県嘉麻市教育委員会の依頼でオンラインのシンポジウムを実施した【５.学会発表：2022 年犬木】。ここでは、同市所蔵の沖出古墳出土埴輪について分析・研究成果を報告し、翌年刊行物として公開した【５.図書：2023 年古谷・犬木】。

また、令和４年度に京都国立博物館所蔵資料の①整理・分析を実施した。①整理・分析の調査対象は、播磨地方西部に位置する兵庫県西宮山古墳(前方後円墳:全長約 35m)の出土埴輪で、家・蓋・石見型盾形など器財埴輪を含む円筒埴輪・朝顔形埴輪で構成される。基本的な器種分類と埴輪群構成の検討、および器財埴輪と主な円筒埴輪・朝顔形埴輪片の実測図作成と写真撮影を実施した。

次に、Ⅱ-2 資料調査（文献）の調査成果（3.A-②）としては、研究分担者所属機関(日本大学・大阪大谷大学)所蔵の図書について、本研究に関する日本古代史における研究文献の調査と文献収集を行った。前者は、古代手工業生産に関する論文で、平成３年度５０件、平成４年度９５件、平成５年７５件を調査し、それぞれ 35 件・48 件・40 件の文献を収集・分析した。後者は、古代日韓交渉史・社会史に関する論文で、平成３年度 106 件、平成４年度 85 件、平成５年度 115 件を調査し、それぞれ 70 件・90 件・100 件の文献を収集・分析した。

２）B（コロナ禍後）期は、まず、上記１）の兵庫県西宮山古墳出土埴輪の調査で得たデータについて、②研究会の開催および③成果報告の公開を実施した。

令和４年度に、研究組織(同 代表者・分担者・協力者)が参加して実施した「Ⅲ国内成果検討研究会」(2022 年９月)において検討・分析を行い、その研究成果は京都国立博物館における特集展示[後期古墳の実像：2023 年１月２日（日）～2 月 13 日(日)]、および講座(令和４年度)で広く公開した【５.図書：2022 年古谷他・学会発表：2023 年古谷】。

同年度は、他にコロナ禍により延期されていた韓国国立中央博物館の半島南部伽耶地域に関する展覧会が日本でも国立歴史民俗博物館[2022.10/4～12/3]・九州国立博物館[2023.1/24～3/19]で巡回され、重要な既存研究成果が集約され最新の加耶地域と半島西南部史像が提示されたため、11 月(国立歴史民俗博物館：千葉)・２月(九州国立博物館：福岡)に調査を実施した。

次に、令和５年度には国内調査として、兵庫県たつの市所蔵資料の西宮山古墳出土埴輪(９月：兵庫)、大分県日田市所蔵資料の朝日天神山 2 号墳出土埴輪(２月：大分)、岩手県奥州市所蔵の角塚古墳出土埴輪(３月)の整理・分析を行った。これらに合わせて、研究組織(同 代表者・分担者・協力者)が参加して、「Ⅲ国内成果検討研究会」を令和４年度９月(京都：上掲)・２月(福岡)・令和５年度９月(兵庫)・２月(大分)・３月(岩手)の日程で実施し、研究成果の分析および問題点の検討を行った。

次に、国外調査に関しては、令和４年度に韓国国立光州博物館・国立羅州博物館における資料調査(11 月)で全羅南道内洞里双墳などの出土埴輪の調査を行うと共に、国立中央博物館において刷新された加耶展示室の展示品・展示構成・展示解説の調査(３月)、令和５年度には韓国大韓文化財研究院でソウル市風納土城などの出土埴輪の調査(３月)を実施した【８.国際共同研究】。

また、「Ⅳ国外(韓国)公開研究会」として、公開で５回の共同研究会を実施した【７.国際研究集会】。令和４年度に慶北大學校(11 月：大邱)・ソウル大學校(３月：ソウル)、令和５年度に慶北大學校(７月・３月：大邱)・ソウル大學校(10 月：ソウル)の日程で、既存の研究成果を含めた本研究の研究成果を公開した。ここでは本研究における現状の研究成果の分析および課題について報告・公開し、討論を行って研究成果の精度を確保すると共に、問題点および今後の課題を明らかにした【５.学会発表:2022～2024 年古谷・平野・犬木】【５.その他・７.国際研究集会】。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古谷 毅	４．巻 第157号
２．論文標題 京都鴨沂会 第５１回教養講座要旨　埴輪と古墳時代の人々 -古代国家成立前夜の社会像-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 鴨沂会誌(公益財団法人京都鴨沂会)	６．最初と最後の頁 7‐9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平野卓治	４．巻 第52集
２．論文標題 神隠丸山遺跡をめぐる可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神隠丸山遺跡Ｉ―平安時代編―(港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告(港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告)	６．最初と最後の頁 46－54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬木努	４．巻 -
２．論文標題 埴輪からみた沖出古墳	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古代史シンポジウム「徹底解剖！沖出古墳とその被葬者像」(福岡県指定史跡「沖出古墳」の最新研究成果を紹介）―オンライン座談会の記録―(嘉麻市教育委員会)	６．最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古谷毅・犬木努他	４．巻 -
２．論文標題 「座談会の記録」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古代史シンポジウム「徹底解剖！沖出古墳とその被葬者像」(福岡県指定史跡「沖出古墳」の最新研究成果を紹介）―オンライン座談会の記録―(嘉麻市教育委員会)	６．最初と最後の頁 41‐54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古谷 毅	4．巻 Ⅲ
2．論文標題 古墳時代の社会と自然 -山と海の信仰-	5．発行年 2021年
3．雑誌名 令和3年度 京都国立博物館 第８８回夏季講座 －日本人と自然－(京都国立博物館)	6．最初と最後の頁 9‐10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古谷 毅	4．巻 -
2．論文標題 金属器・埴輪研究の特質と展望 （Ⅰ）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古墳文化基礎論集(真陽社)	6．最初と最後の頁 363‐374
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古谷 毅	4．巻 -
2．論文標題 後期古墳の実像	5．発行年 2021年
3．雑誌名 特集展示　西宮山古墳―西播磨の首長墓―(京都国立博物館 展覧会図録)	6．最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 別冊33
2．論文標題 埴輪はどのように認識され分類されてきたか？―形式、作風、型式から同工品まで―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学(雄山閣)	6．最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 第3号
2．論文標題 大木台２号墳 形象埴輪配置の再検討―〈構造軸〉による形象埴輪配置の二大別―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 研究紀要(印西市立印旛歴史民俗資料館)	6．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 第3号
2．論文標題 山田谷々津古墳出土埴輪の再検討	5．発行年 2021年
3．雑誌名 研究紀要(印西市立印旛歴史民俗資料館)	6．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 －
2．論文標題 「領域」が対峙する場所―「下総型」埴輪と異系統埴輪の共存／対置―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古墳文化基礎論集(真陽社)	6．最初と最後の頁 1‐10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 第26号
2．論文標題 書評 若松良一著『埴輪―研究法と解釈法―』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 埴輪研究会誌(埴輪研究会)	6．最初と最後の頁 93-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平野卓治	4．巻 第106号
2．論文標題 『出雲国風土記』における楯縫郡の位置付けに関する覚書	5．発行年 2022年
3．雑誌名 史叢(日本大学史学会)	6．最初と最後の頁 14-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 第３冊
2．論文標題 古墳と古墳群のトポス―盟主的首長墓の〈空間構制〉試論―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 論集 空間と境界(大阪大谷大学歴史文化学科調査研究報告書)	6．最初と最後の頁 1-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木努	4．巻 第163号
2．論文標題 〈円筒埴輪配置論〉の現在地	5．発行年 2023年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 犬木努	4．巻 第163号
2．論文標題 関東における形象埴輪「列状配置」の系統と展開	5．発行年 2023年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬木努	４．巻 第20号
２．論文標題 西都原169号墳出土船形埴輪の再検討-西都原古墳群で出土した「二つ」の船形埴輪とその学史的経緯-	５．発行年 2024年
３．雑誌名 宮崎県立西都原考古博物館研究紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　1件／うち国際学会　14件）

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 古墳時代における沖出古墳の意義
３．学会等名 「徹底解剖！ 沖出古墳とその被葬者像：オンライン座談会」(福岡県嘉麻市教育委員会・筑豊文化財行政連絡協議会主催シンポジウム)［2020年10月25日(土)：嘉麻市教育委員会(嘉麻市)］（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 古谷 毅
２．発表標題 西宮山古墳の発掘調査と出土品の意義
３．学会等名 京都国立博物館 第1915回土曜講座［2022年1月20日(土)：京都国立博物館(京都市)］
４．発表年 2022年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 福岡県沖出古墳出土埴輪分析
３．学会等名 第１回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2022年11月20日(日)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］ ）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 平野卓治・古谷 毅
２．発表標題 日韓(加耶他)交渉史の問題点Ⅰ
３．学会等名 第１回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 ［2022年11月20日(日)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 日本考古学における加耶史像：加耶展2020年日本展(国立歴史民俗博物館・九州国立博 物館)分析報告
３．学会等名 第２回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 ［2023年3月5日(日)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 平野卓治
２．発表標題 日本古代史における加耶史像：加耶展2022年日本展(国立歴史民俗博物館・九州国立博 物館)分析報告
３．学会等名 第２回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 ［2023年3月5日(日)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 韓国の人物・動物埴輪
３．学会等名 第２回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 ［2023年3月5日(日)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 平野卓治
２．発表標題 日韓古代史の問題点-百済(馬韓)加耶地域の人的交流
３．学会等名 第２回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年3月5日(日)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 韓国出土形象埴輪分析計画
３．学会等名 第３回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年7月8日(土)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 古谷 毅
２．発表標題 古代日韓(加耶他)交流史の問題点Ⅱ－分析と研究の展望－
３．学会等名 第３回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年7月8日(土)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 兵庫県西宮山古墳出土埴輪の検討-埴輪群の概要とハケメ分析-
３．学会等名 第４回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年10月7日(土)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 平野卓治
２．発表標題 古代手工業生産史における古墳時代工人像
３．学会等名 第４回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年10月7日(土)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 古谷 毅
２．発表標題 古代日韓(加耶他)交流史の問題点Ⅱ－分析と研究の展望－
３．学会等名 第４回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2023年10月7日(土)：ソウル大學校人文大學セミナー室(ソウル市)］（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 犬木努
２．発表標題 日本列島における形象埴輪の配置と構造
３．学会等名 第５回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2024年3月2日(土)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 古谷 毅
２．発表標題 古代日韓(加耶他)交流史の問題点Ⅲ-日韓埴輪群構成における人物・動物表現:
３．学会等名 第５回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2024年3月2日(土)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 平野卓治
２．発表標題 古代手工業生産史における古墳時代の工人・労働力編成試論
３．学会等名 第５回日韓共同研究会:古代韓日交渉史　［2024年3月2日(土)：慶北大學校人文大學韓國振興館(大邱市)］（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計2件

１．著者名 古谷毅・犬木努他	４．発行年 2021年
２．出版社 嘉麻市教育委員会	５．総ページ数 56
３．書名 徹底解剖!沖出古墳とその被葬者像 :古代史シンポジウム ： オンライン座談会の記録 ： 福岡県指定史跡「沖出古墳」の最新研究成果を紹介	

１．著者名 古谷毅他	４．発行年 2021年
２．出版社 京都国立博物館	５．総ページ数 34
３．書名 特集展示　西宮山古墳―西播磨の首長墓―(京都国立博物館 展覧会図録)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際研究集会(次第)
第１回：第1部1)京博科研研究會成果／2)同 調査研究會計畫
　第2部日韓埴輪生産と古代東亜細亞交流史：1福岡県沖出古墳出土埴輪分析／2咸平郡金山里方台形墳出土埴輪分析／3古代日韓(加耶他)交渉史の問題点Ⅰ／4古代韓日交流史の成果と展望／5韓半島三國時代銅鏡の現況と問題／6唐代東亜細亞陵墓十二支神像の交流史／7三國時代韓半島石築山城の築造技術と技術交流
　第3部討論：古墳時代の埴輪生産体制と韓国の埴輪生産
第２回：１日本考古学における加耶史像：加耶展2020年日本展(国立歴史民俗博物館・九州国立博物館)分析報告
　２日本古代史における加耶史像：同 分析報告
　３韓国考古学における加耶史像：1馬韓・加耶地域墳墓研究状況／2榮山江流域の墳墓・副葬品・埴輪に関する研究状況
　４韓日(日韓)交流史の問題点：3韓国の人物・動物埴輪／4日韓古代史の問題点-百済(馬韓)加耶地域の人的交流-
　５討論：1韓国国立中央博物館加耶室展示の構成、2韓日(日韓)の加耶像の問題点
第３回：第1部京博科研研究會 研究計畫他：2022年度研究會報告／同 調査・研究會計畫報告
　第2部韓国の埴輪生産と古代日韓交流史：1日本における韓国出土埴輪分析／2韓国出土形象埴輪分析計画／3古代日韓(加耶他)交流史の問題点Ⅱ—分析と研究の展望—／4六世紀韓半島と日本列島の波斯国と北朝文物の移入と背景／5大阪府寝屋川市出土臺付直口壺の性格と系譜
　第3部討論:日韓埴輪生産と古代日韓(加耶他)交流史
第４回：第1部1古墳時代の船形形象物にみる日韓の往来／2兵庫県西宮山古墳出土埴輪の検討-埴輪群の概要とハケメ分析-／3古代手工業生産史における古墳時代工人像／4古代日韓(加耶他)交流史Ⅱ-分析と研究の展望-
　第2部5栄山江流域の前方後円墳の空間的再検討／6同流域出土のガラス玉の歴史的意味
第５回：第1部 韓国の埴輪生産と古代日韓交流史：1日本埴輪研究史と柳井茶臼山古墳研究会の成果-埴輪群組成とハケメ分析-／2日本列島における形象埴輪の配置と構造／3古代日韓(加耶他)交流史の問題点Ⅲ-日韓埴輪群構成における人物・動物表現／4古代手工業生産史における古墳時代の工人・労働力編成試論
　第2部古代東アジア文化交流史：5最新湖南地域出土資料と提起される問題
　第3部討論:日韓埴輪生産と古代日韓(加耶他)交流史

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	平野　卓治 (HIRANO TAKUJI) (20822216)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	犬木　努 (INUKI TSUTOMU) (40270417)	大阪大谷大学・文学部・教授 (34414)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計5件

国際研究集会 第１回日韓共同研究会:古代韓日交流史 京都国立博物館科学研究費(基盤B)研究会・慶北大學校 共同研究會[2022年11月20日(日)：大邱市]	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 第２回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 京都国立博物館科学研究費(基盤B)研究会・ソウル大學校 共同研究會[2023年3月5日(日)：ソウル市]	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第３回日韓共同研究会:古代韓日交流史 京都国立博物館科学研究費(基盤B)研究会・慶北大學校 共同研究會[2023年7月8日(土)：大邱市]	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第４回日韓共同研究会:古代韓日交渉史 京都国立博物館科学研究費(基盤B)研究会・ソウル大學校 共同研究會[2023年10月7日(土)：ソウル市]	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第５回日韓共同研究会:古代韓日交流史 京都国立博物館科学研究費(基盤B)研究会・慶北大學校 共同研究會[2024年3月2日(土)：大邱市]	開催年 2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	慶北大學校	ソウル大學校	国立中央博物館	他1機関